



国際協力の活動として、「寄付や募金をする」「ボランティアをする」「援助物資を送る」「チャリティーイベントを企画する／参加する」「フェアトレードの商品を買う」など、問題解決に向けた取り組みは増えています。一方で、貧困のない公正な社会を実現するには、そうした活動に加えて、国内の法律や国際的な制度やルールなどの政策面の改善が不可欠です。そして、政策を変えるように声をあげる「アドボカシー活動」も、問題解決に向けた方法の一つです。

この教材は、世界の貧困の実際について知ると同時に、アドボカシー活動という「国際協力」を知り体験してもらうために作成されました。STAND UP TAKE ACTION がきっかけとなり、アドボカシー活動が身近な国際協力活動であることに多くの人気がつき、それは自分にもできるということを実感し、継続して行動してもらえることを願っています。ぜひ多くの方に、この教材を使ってさまざまな発見ができる場を作っていただくと嬉しいです。



使い方

本教材は指導者用の「解説編」と参加者 学習者用の「ワークシート編」に分かれています。貧困をはじめとする地球的諸問題の現実や原因を知る「アクティビティ1」と、どのように問題に取り組めるのか、自分に何ができるのかを考える「アクティビティ2」の2部構成となっています。



対象 中学生以上（アレンジにより、小学校高学年から実施できます）



時間 50分～90分



- 準備**
- 世界地図（国名が入っているものが望ましい）
 - 「STAND UP TAKE ACTION 2012 教材 ワークシート編」を人数分
 - 「違いはどこにある？」のカード（本紙7ページのカードA～Cを切り分ける）を、グループ数分のセット
 - 「ストーリー」のカード（本紙7～8ページのストーリーA～Cを切り分ける）をあわせて人数分の枚数

本教材は、特定非営利活動法人開発教育協会が作成しました。また教材の作成にあたっては、次の各団体にご協力いただきました。公益財団法人プラン・ジャパン／特定非営利活動法人ハンガー・フリー・ワールド／特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会

すすめかた

■ねらい

世界各地で貧困状態に置かれている人々がいること、また、そうした人々が、個人の事情にとどまらない、さまざまな原因や社会状況の中で貧困の状態に置かれてしまうことを知る。

※時間が限られている時や対象の学習状況に応じて、③～⑤は簡単に紹介程度にし、⑥以降を中心に行なうこともできます。

①4～5人のグループになる。

②インド、ブルキナファソ、バングラデシュ、英国がどこにあるかたずねる。世界地図で探してみる。それぞれの国について、知っていることを挙げてもらう。

③A～Cの3枚の「違いはどこにある？」のカードを、グループに裏にして配布する。カードには、世界の異なる2つの場所に住む人のことが書かれていることを説明する。

④カードを1枚ずつ順番に裏返して、そこに書かれているふたりの状況のちがいについて、「あっても良いと思う」「あってはならないと思う」「どちらとも言えない」のいずれかに、分類してもらう。決まった答えはないので、自分たちの考えで分類するよう伝え、なぜそのように分類したのかの理由も考えてもらう。参加者の反応に応じて適宜、次の「考えるポイント」を提示してもよい。

《考えるポイント》

A) ウエドラオゴさんが1食しか食べられなくなった理由はなんだろう。

B) 真奈美さんとショリファちゃんの年齢のちがいに注目してみよう。

C) マニシャちゃんの家では弟だけが学校に行けるということについて、どう思うか話し合ってみよう。

⑤全てのグループで、3枚のカードを分類し終わったら、全体でどのように分類したか、なぜそう考えたのかを共有する。その後、やってみての感想や他のグループの話聞いて思ったことを尋ねる。

⑥個人で、A～Cのカードの中から「最も気になるもの」を1枚選ぶ。それに該当する「ストーリーのカード」を各自で読んで、「私の気持ちワークシート」に感じたことを記入する。

⑦グループ内で、ワークシートに記入した内容を話して共有する。

⑧3枚のカードの背景について適宜解説する。

解説

1) 「違いはどこにある？」のカードとストーリーについて

A～Cのカードとストーリーは、MDGsのゴールと次のように関連しています。

A) 食料価格高騰のまま高止まりしてしまっている現状 (ゴール1)

食料価格高騰に投機マネーが入ったことでエスカレートしたこと (ゴール8)

気候変動とエンゲル指数の高さが被害を増大させていること (ゴール1と7)

B) 親に適切な収入がないために、子どもが労働に従事しなければならない状況 (ゴール1と2)

C) 女性のエンパワメントにより生まれる可能性 (ゴール4)

ジェンダーによって女の子のチャンスが少なくなっていること (ゴール3)

2) 「ストーリーのカード」について

A: 食料価格高騰と飢餓

(※このストーリーは (特活) ハンガー・フリー・ワールドから提供を受けた情報を参考に作られました)

? なぜ 2008 年に食料価格が跳ね上がったの？

● バイオエネルギー

CO2 を出さず、価格が急上昇した石油に頼らず、かつ、地下資源を枯渇させずに、何度も栽培することができる植物からエネルギーを作り出す、というバイオ燃料が注目を集めました。しかし、バイオ燃料を作るためには、元々食用だったサトウキビや大豆、トウモロコシを燃料用にする必要があります。市場にある物を多くの人が欲しい、といった結果、値段が跳ね上がりました。(参考：ハンガー・フリー・ワールド『飢餓を考えるヒント』)

● 投機マネー

投機とは「お金でお金を生むための活動」と言い換えられます。値段が激しく上下している商品に目を付け、一番安い時に買い、一番高くなったら売る、という方法でお金を一番多く儲けよう、という活動です。この投機をするためのお金が多く一斉に穀物につぎ込まれたことが、食料価格が急激に値上がりしたひとつの原因、だと言われています。(参考『飢餓を考えるヒント』ハンガー・フリー・ワールド他)

? なぜブルキナファソの人の食事は 1 食に減ったの？

ブルキナファソでは、家計の支出に占める食費の割合(「エンゲル係数」と言います)は農村部で 45%、都市部では 75%と言われています。つまり、交通費や遊ぶためのお金等に回す以前に、食べ物を買うために、その時もっているお金のほとんどを使ってしまうのです。そのため、わずかでも食料価格が上昇することが、家族の食事の量や質だけでなく、子どもを学校に行かせるための教育費など、その他の生活全体の事にも直接影響してくるのです。(参考『飢餓を考えるヒント No.2』ハンガー・フリー・ワールド他)

? 途上国の人は自給自足してないの？

世界の最貧 70 カ国は先進国から穀物や酪農製品などの基礎食料を輸入し、先進国に対してコーヒーやカカオなどの嗜好品を多く輸出しているという傾向があります。元々は途上国も自国で主食を含め自給していたはずですが、植民地時代と独立後の債務返済のため、生産する作物を主食でなく、コーヒーや砂糖のように限られた作物のみ生産するよう強制されてきた歴史があります。さらに、先進諸国で余った穀物が地元で収穫されるものよりも安値で輸入されてきたため、国内での生産が難しくなりました。(参考『飢餓を考えるヒント No.3』ハンガー・フリー・ワールド他)

? トウモロコシの粉を練ったパットってどんな料理？

ブルキナファソで主食として良く食べられている料理です。トウモロコシの粉をお湯で練って、オクラやマメの入ったシチューのようなソースをかけて食べます。

B：児童労働と貧困

(※このストーリーは(特活)シャプラニール=市民による海外協力の会発行の『家事使用人として働く子どもたち』を参考に作られました)

? 学習センターってどんなところ？

ユニセフやバングラデシュ政府、または日本の外務省の支援を受けて、様々な NGO がバングラデシュ国内に開設している働く子どものための学習センターです。

例えばショリファちゃんのような少女が通っているのは、少女たちの支援を専門に行っているセンターです。働きながら定期的に少女たちが通えて、幼いころから他人の家で家政婦として働いてきた少女たちに基本的な読み書きなどの教育や、仕事にも活かす事のできるアイロンがけや刺繍などのスキルアップトレーニング、さらには、少女たちが生きるために必要な性教育や衛生についての教育など実用的な学習や、普段は同年代の子どもと遊ぶことの無い彼女たちが自由に遊べる時間や、自らの経験などを話し合う機会などが提供されています。(参考『家事使用人として働く少女たち』シャプラニール)

? バングラデシュにはどのくらい児童労働をしている子どもがいるの？

2003年にバングラデシュ政府が行った調査によると、5歳から17歳までの子どもの内、742万人が何らかの形で家計を助けています。その内、児童労働をしている子どもは318万人いると推計されています。(参考『家事使用人として働く少女たち』シャプラニール)

? 児童労働とは？

児童労働とは、法律で定められた就業最低年齢を下回る子どもたちによってなされる労働の事です。また、子どもたちの健全な成長を妨げる労働をさし、家や畑での手伝い、小遣い稼ぎのアルバイトなどは含まれません。また、世界には2億1500万人の、児童労働者と呼ばれる子どもたちが存在します。(参考：国際労働機関 (ILO)、数値は2010年に同機関から発表)

? なぜ、児童労働をなくす必要があるの？

国際法とバングラデシュの国内法に違反し、全ての子どもが生まれながらに人権として保障されている多くの機会を奪い、さらに子ども自身を危険にさらす仕事であるためです。児童労働は子どもが教育を受ける権利を侵害し、十分な教育が受けられないまま大人になることで、貧困の連鎖につながります。

また、危険な場所での作業や、道徳的に不適切な環境(例えば少女売春など)での労働、親から離れての労働は子どもの心身の健全な発達を妨げ、子どもの将来に関わるリスクを子ども自身に負わせるためです。(参考：国際労働機関 (ILO))

? 貧困と児童労働と教育の欠如が生む「貧困の連鎖」とは？

児童労働の一番の原因は貧困です。他にも、その地域の中では子どもが働くことが当たり前のことになっていたり、親自身に教育を受けた経験がなく、教育の必要性が分からなかったり、子どもが通える距離や場所に学校がなかったりと、様々な原因があります。

しかし、それらの結果として子どもが児童労働をし、教育を受けられないことで、その子どもが大人になった時に十分な収入を得られる職に就くことができななかったり、成人しても文字の読み書きができないことで、生活や生存に必要な情報を収集できなかったりといった、子どもの親が抱えていた問題がその子どもが将来産み育てる未来の子どもにまで引き継がれることになるのです。(参考：国際労働機関 (ILO))

C：女子教育の重要性

(※このストーリーは(公財)プラン・ジャパン発行の『貧しい国で女の子として生きるということ』を参考に作られました)

? なぜ女の子は学校に行けないの？

日本も先進国の中では女性の社会進出が遅れています。男女平等参画が進められ、制度上は女性が活躍しない理由などないかのようなのですが、事実、日本の女性国会議員の割合は世界107位13%と、先進国ではトップの世界第4位のスウェーデンの45%には遠く及びません。

インドにもジェンダーの平等を重要視した憲法や、地方議会における女性議員の割合を一定以上に保つ為の法律などがあります。しかし、制度はあっても、それが識字率の低さなどから知られず、また、「伝統」ということで一般市民が女性の権利を大幅に奪っている多くの慣習を見直す流れにはなっていないようです。インドでは多く、女性を夫や家庭の経済的負担であり、女性は家庭内の男性が決めることや行うことに黙って従うものだと考えられています。また、そのように振る舞うことが、「善良な女性」という社会の中のイメージと結びついているということも、この慣習を見直すことが難しい一つの理由です。家庭内での暴力や女性を取り巻く問題自体が「私的な問題」とされ、公の場で議論される機会が少ないことも問題解決を遅らせる要因になっているのです。

このような、少女だけでなく女性を取り巻く環境の中で、少女たちの学校、特に中等教育以上の教育を受ける機会は

少なくなっています。

(参考『Women in national parliaments』IPU <http://www.ipu.org/wmn-e/classif.htm>、
パメラ・シングラ『インドにおける女性の権利とジェンダーに基づく暴力』
http://www.nwec.jp/jp/data/13_pamelasingla_NWECJournalvol.14.pdf、『世界子供白書 2012』ユニセフ)

? 結婚持参金とは？

日本で伝統的に花婿が花嫁の家に対して結納を渡すように、結納とは渡す相手が逆になります。結婚持参金（インドの場合、「ダウリー」と呼ばれる）とは、花嫁が結婚に際して相手方に渡す金銭や高価な物品のことを言います。この結婚持参金の額や量が少ないといったところで、花婿とその家族からのいじめが始まり、殺害に至ることまであるのです。インドでも法律では結婚持参金の受け渡しは禁止されていますが、未だに結婚持参金関連の問題は発生しています。

(参考 パメラ・シングラ『インドにおける女性の権利とジェンダーに基づく暴力』
http://www.nwec.jp/jp/data/13_pamelasingla_NWECJournalvol.14.pdf)

? どのくらいの女の子が学校に通えてないの？

ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）の「ゴール3：ジェンダー平等の推進と女性の地位向上の目標3-A」として、2005年までに初等・中等教育で男女格差の解消を達成し、2015年までにすべての教育レベルで男女格差を解消する、とあります。初等教育における格差は大幅に解消されつつあります。男児100人に対する女児の就学数は、1999年の91人から、2008年の96人に改善しました。しかし、2007年、初等・中等教育の両方で男女平等を達成したのは、データが入手できた171か国のうち、53か国のみでした。例えばインドの場合、小学校就学率は男児が90%、女児87%、中学校就学率はさらに下がり、男児が59%、女児が49%です。

(参考『EFA Global Monitoring Report2010』UNESCO、『世界子供白書 2010 特別版』ユニセフ)

? 女性の識字率

インドでは15-24歳の若者の内、88%の男子、74%の女子が文字を読み書きすることができます。近年経済成長が目覚ましいインドですが、これは開発途上国の平均である若者の識字率（文字を読み書きできる人の比率）男子91%、女子85%を大きく下回っているのです。(参考『世界子供白書 2012』ユニセフ)

? 女の子が教育を受けられると、どんな可能性があるの？

女の子が初等教育を5年間受けると、将来生む子どもが5歳まで生きのびる確率が40%以上も上がる、という報告があります。お母さんが読み書きできるようになって健康や育児に関する知識を身につければ、自分や子どもの健康を保つことができるようになります。また、人々が健康であることは、社会全体が健康であることの基本でもあるのです。

(『Girls' Education in the 21st Century Gender Equality, Empowerment, and Economic Growth』世界銀行、岩附由香 他『わたし8歳、カカオ畑で働きつつけて。』合同出版)

アクティビティ2 「解決のための行動～何ができるの？」

すすめかた

■ねらい

貧困のない社会をつくるひとつの方法として、アドボカシーがあることを知る。

貧困をなくすために、自分にできること、やりたいことを考える。

①ウエドラオゴさん、ショリファちゃん、マニシャちゃんのストーリーを読んで、それぞれの暮らしをよりよくするためには、どんな点を改善する必要があるのか、自由に考えてもらう。例：食糧価格が上がらないようにする、労働時間を少しでも短くする、家族や周囲が教育の重要性を理解する、など。

※個人の努力や意識変化だけでは解決できないことも多いことを確認する。

②世界には、飢餓に苦しむ人、教育や医療を適切に受けられない人、環境破壊で仕事や家をなくす人などがたくさんいるが、そうした人々がいない世界とするために、どのような取り組みが必要だと思うか、考えてもらう。また実際にどのような取り組みがなされているか、知っていることや調べたことを話し合う。

③貧困など地球規模の諸問題解決に向けた取り組みのひとつとして、アドボカシー活動について説明する。また次のようなアドボカシー活動の事例を紹介する。

◎たとえば、世界では子どもたちが：

－環境保護を訴えるために、地域で人形劇の上演、壁画の制作などを実施（エルサルバドル）

－MDGsの達成を呼び掛けるために、世界中の子どもたちと一っしょにニュースレターを作り、G8サミットで各国首脳に配付（イギリス）

◎日本でも子どもたちが：

－関心のある問題についてポスターやチラシを作り、文化祭などで発表して、学校内外の人に多く知らせる

－世界中の子どもたちが教育を受けられるように訴えるキャンペーンの署名活動に参加し、集めた署名を外務大臣に手渡す

④アクティビティ1を受けて、個人で「ふり返しシート」に記入する。その後グループで共有する。

⑤アドボカシー活動のひとつとして、STAND UP TAKE ACTIONの「オリジナル宣誓文」を書いてみることを提案する。各自、ふり返しシートに記入したことを参考にしながら、「オリジナル宣誓文」の用紙に記入する。全員が書き終わったら、全体で共有する。

⑥MDGsについて説明する。MDGsの達成は世界の指導者たちの約束であること、MDGsは世界の貧困問題解決への取り組みに対し、具体的な数値目標を定め達成期限を設定した点が画期的であることを、確認する。

解説

アドボカシー活動

「募金をする」「援助物資を送る」「チャリティコンサートに参加する」「エコバックを持つ」「省エネ製品に買い替える」など、貧困や気候変動などの地球規模の諸問題解決に向けた個人の取り組みは増えています。

一方、それらの問題解決のためには、国内外の政策の改善が不可欠です。この政策を変えるための活動をアドボカシー活動といいます。政策を変えるためには、その問題が起こっている根本的な原因を理解し、それを解決するための提案を、政策を決定する責任のある政治家や政府の担当者などに届けることが重要です。そして、政治家や政府の担当者にその問題を重要と思ってもらえるよう、問題に気づいたできるだけ多くの人たちが声をあげていくことが、とても大切です。この「声をあげる」という行為は、特別な知識や資格は必要なく、私たち全員が参加できる行為でもあります。

ミレニアム開発目標／MDGs

2000年にニューヨークで開催された国連ミレニアムサミットで189の国の代表者は、「世界中の一人一人に、尊厳を有し、飢餓がなく、暴力抑圧不公平の恐怖から解放されて、人間らしく生きる権利がある」ことを確認し、“21世紀の国際社会の目標”として「国連ミレニアム宣言」を採択しました。この国連ミレニアム宣言と90年代に開催された他の国際会議、サミットで採択された国際開発目標を統合し、ひとつの共通した枠組みとしてまとめたものが「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals：MDGs）」です。先進国と開発途上国双方を含む世界中の指導者が、最も国際社会の支援を必要とする課題に対して、2015年という達成期限と具体的な数値目標を定め、その実現を公約しました。MDGsは、2015年までに国際社会が達成すべき8つの目標、21のターゲット、59の指標を掲げています。

STAND UP TAKE ACTION

「STAND UP TAKE ACTION」は、貧困のない世界を実現するために、ミレニアム開発目標/MDGsの達成を世界のリーダーたちに訴える活動です。世界同時キャンペーンであり、だれでも、どこからでも参加できます。詳しくはチラシまたはHP（<http://www.standup2015.jp/index.html>）をご覧ください。

アクティビティ1 「違いはどこにある？」カード

※カードは切り離して、1グループに1セットずつお使いください。

カードA

2008年に食料の値段が世界的に跳ね上がったことで、イギリスに住むダンさんは60円値上がりしたいつもの食パンを、文句を言いながらも買いました。

西アフリカのブルキナファソに住むウエドラオゴさんは、食事を1日2食から1食に減らしました。

カードB

日本に住む17歳の真奈美さんは、昼間はスーパーで働きながら、夜間の高校に通っています。

バングラデシュに住む9歳のショリファちゃんは他人の家で家政婦として働きつつ、1日2時間、働く子どものための学習センターに通っています。

カードC

北インドに住むマニシャちゃんは毎日お母さんと家事をして過ごし、弟は月曜日～土曜日は学校へ行きます。

日本に住む美咲ちゃんはお兄ちゃんと一緒に平日に小学校へ通っています。



アクティビティ1 ストーリーのカード

※カードは切り離して、一人1枚ずつお使いください。

ブルキナファソの村で農家をしているウエドラオゴさんは困っています。今までは家族の食べる食料の大半を自分の畑で作ってきましたが、今年は十分できませんでした。この村では、農作物を育てるのに適した気候の雨季（6月～10月）に種まきから収穫をして1年分の食料を蓄え、乾季（11月～5月）に備えますが、雨水など自然に頼った農業をしているため、雨の降り方がその1年の家族の生活を左右します。しかし、2011年にブルキナファソのある西アフリカで干ばつが起こり、1年分の食料を作るのに欠かせない雨が、雨季に入っても定期的に降らなかったのです。そのため、十分な量の食料を蓄えることができず、市場で買ってこなければならなくなりました。

そのうえ、2008年頃からトウモロコシの粉や米などの穀物、他にも油や砂糖などの調味料の値段が跳ね上がり、高いまま一向に下がりません。以前はたまに贅沢をして肉を買ったりできましたし、普段も1日2食、伝統的な料理であるトウモロコシの粉を練ったパットという料理にソースをかけて食べていましたが、最近では大人の食事は夕方の1食だけ、それもソースは作れず、トウモロコシの粉を水で練っただけのものをただの塩味で食べる生活が続いています。

ストーリーA

9歳のシヨリアちゃんは、公務員のマシュレカさんの家に1年前から家事をするため、マシュレカさんの家で住み込みで働いています。

シヨリアちゃんは3人姉妹の末っ子です。お姉さんも、シヨリアちゃんと同じくらいの歳の頃から別の人の家に住み込みながら家事をして、家計を助けてきましたが、最近結婚しました。シヨリアちゃんの家族は農村に住んでいます。自分たちの農地を持っておらず、村には仕事もありません。また、低地の多いバングラデシュでは川の増水が頻繁に起こり、その度に田畑や家が流されてしまいます。そこで貧しい家庭を支えるため、子どもたちは大きくなると順々に働きに出されるようになりました。

シヨリアちゃんがマシュレカさんの家に初めて来た時、シヨリアちゃんは病気にかかりげっそりとやせた状態でした。シヨリアちゃんの家には病院に連れていくだけのお金がなかったからです。マシュレカさんはシヨリアちゃんに治療を受けさせ、お茶の淹れ方から料理の仕方まで家事を一から全部教えました。今では毎日午後、働く子どものための学習センターへ1日2時間通いつつ、シヨリアちゃんは朝6時～夜12時まで洗濯や掃除、食事の支度などをして働いています。

ストーリーB

北インドの小さな村にマニシャちゃんは家族と暮らしています。この地域では女の子より男の子の方が大事にされます。5歳の時から水汲みがマニシャちゃんの仕事になり、それから12歳になる今まで学校に行かず家事の手伝いをしています。制服に着替えて学校に向かう弟を見ると、学校に行って読み書きを勉強してみたいと思いますが、貧しいマニシャちゃんの両親には弟の分の教科書を買うことが精一杯なことを知っています。そして今、両親がマニシャちゃんに望んでいることは、早く結婚してくれることです。この地域では、結婚するため、花嫁を送り出すには、花婿の家にお金を払わなければならないのですが、幼い花嫁だと、そのお金が少なく済むからです。貧しい両親には他に選択肢がないのです。

マニシャちゃんのお父さんは子どものころ、家から通える場所に中学校がなく、小学校までしか通えなかったのでも、おとなになってから良い給料を得られる職業につけませんでした。また、マニシャちゃんのお母さんは学校に通ったことがないので、女の子が教育を受けることの大切さがわかりません。マニシャちゃんの友だちのお母さんにも学校に通ったことがなく、読み書きのできない人は多くいます。そのため、学校に一度も通わず、もうすぐ結婚するしかないのかな、とマニシャちゃんは思っています。

ストーリーC

動く → 動かす
もう一歩、貧困のない世界へ

「動く→動かす」は、途上国の貧困問題に取りくむNGO69団体が加盟するネットワークです。「貧困を生むしくみを変える」ことを目的に、スタンド・アップをはじめとするキャンペーンや政策提言などのアドボカシー活動を行っています。世界131カ国に拠点を持つ貧困解決のための市民団体ネットワークGlobal Call to Action against Poverty (GCAP) の日本版です。

本教材の内容についてのご質問、ご相談は
(特活) 開発教育協会までお問い合わせください。

(特活) 開発教育協会 / DEAR

URL : <http://www.dear.or.jp/>

TEL : 03-5844-3630

E-mail : main@dear.or.jp



わたしたちは公正な地球社会の実現を目指し「知り・考え・行動する」開発教育を推進するNGOです